

黙示録の記録

第11章

創造主の二人の証人

著／ヘンリーモリス

訳／宇佐神 正海

黙示録の記録

目次

- 第10章 甘くて苦い相続
- 第11章 創造主の二人の証人
- 第12章 長い期間にわたる闘争
- 第13章 邪悪な三位一体
- 第14章 永遠の福音

第11章 創造主の二人の証人

黙示録11章で、私たちはこれ以上あり得ない特別な出来事の一つ、そして黙示録の中で最も魅惑的な章の一つに出会います。この章の情景は10章の情景の続きなので、その区分は独断的です。13か月続いた第二の災害（悪霊につかれた馬に似た生き物の災害）の行程は、丁度終わりのつりつりあります。そして、頭に虹を戴いた天使として現れた主イエス・キリストが、ヨハネに話しかけています。

新しい宮殿

パトモスにヨハネがいた時、かつてエルサレムの美の象徴であった素晴らしい神殿は、二十五年昔の思い出に過ぎなくなっていました。事実、キリストが、「石がくずされずに、積み残されたまま残ることは決してあり

ません。」と、その崩壊を予言した時、ヨハネはオリブ山にいました。「マタイによる福音書24章2節」その予言は、西暦七〇年ローマの軍隊によって成就していたのです。

そして、昔の預言者たちは、終わりの時代に起こるはずのこととして、聖なる神殿についてしばしば言及してきました〔エゼキエル書40、48章、アモス書9章11節、ミカ書4章1節、ハガイ書2章9節；そしてゼカリヤ書6章12、13節〕。それゆえ、ともかく何らかの過程で神殿はいつの日か再建されるに違いないのです。

ヨハネが黙示録を書いた時、このことを知りえなかったとはいうものの、彼の死後、神殿が再建されないで、すでに19世紀以上過ぎ去りました。聖なる都は「異邦人に踏み荒らされる」となっています。その上、神殿があるべき場所に、長い年月がたった今もお、回教寺院が建っているのです。

しかし、ある日、神殿は再び建て上げられるはずで、そして、これがヨハネが見る事を許された神殿であり、黙示録にある神殿です。

黙示録11章1節 それから、私に杖のような測りざおが与えられた。すると、こう言う者があった。「立て、神（創造主）の聖所と祭壇と、また、そこで礼拝している人を測れ。

前に示したように、天使はキリストです。そして、キリストだけが、究極的に新しい神殿建立を許される方です。けれども地上では、イスラエル政府とヨーロッパ連合の長との間で取り交わされる条約によって認可されます。六章（p10111を見よ）に記されているように、やがて出現するこの王は、イスラエルの指導者と七年の契約を結びます〔ダニエル書9章27節〕。そして、彼らに神殿の再建、犠牲の捧げものを含めイスラエ

ルの古代の礼拝を再び制定するのを認めます。

正統派のユダヤ人たちは、長い間この日を夢見ており、機会ある毎に神殿を再建しようと何十年もの間、計画を練ってきました。ロシアとその同盟軍イスラムの敗北〔エゼキエル書38章〕がその機会を奇跡的に提供し、彼らはそれを思う存分利用します。建築に携わる一団は、神殿の位置に現在建っているイスラムの「岩のドーム」を速やかに破壊し、それから、速やかに荘厳な新しい大建造物である神殿を建設します。それが完成し奉獻される時、レビ記にある儀式と捧げものが回復されます。そして、忠実な正統派のユダヤ人の多くがそれに加わり始めます。

しかし、多くの人びと、一般の異邦人社会だけでなく、ユダヤ人の兄弟たちの多くにとってさえこの儀式は、確かに奇妙なアナクロニズム（時代錯誤）に思われるでしょう。洗練された現代人たちが、もう一度犠牲の祭壇に雄牛と山羊の血を實際にささげ始めるということは、多くの人にとって受け入れがたいでしょう。例えば、この期間はロシアの軍勢から奇跡的に救出された故に、世界中を恐怖に閉じ込めたイスラエルで始まるとしても、昔からの偏見と敵意は間もなく再び表に現れてきます。

古代の礼拝を実際に行うのは、ユダヤ人のすべてが大部分なのかさえ疑わしいのです。シオニストユダヤ人の多くが無神論者というものの、彼らは彼らのために創造主が干渉されたことに深い感銘を受けていたので、多くの人は、超正統派によって制定された動物の犠牲に嫌々ながら参加することでしょう。

けれども、進んで動物の犠牲を捧げる多くの人々がいます。天使がヨハネに注意を向けさせたのはこれらの人々に対してです。神殿が建てられ、犠牲の捧げものが活発に行われる時までには、患難期の最初の三年半の大部分が終わってしまうでしょう。そして、ヨハネが遣わされたのがこの時点においてです。

ヨハネは最後のラツパが鳴り響いている、患難期の後半に目立つ人々のその時について、人々と王たちに再び預言しなければならないと本当に告げられたのです。かつまた、ヨハネが諸民族のうち、最初に預言しなくてはならないのはイスラエルです。

「聖所と祭壇と、そこで礼拝している人々を測れ」との指図は何か謎めています。ヨハネが測定に用いるアシ(ギリシヤ語 *Kalamos*)は通常ヨルダン川の流域に生え育っていて、多くの用途がありました。その一つが物差しの竿としてでした。竿に用いられないより短いのはペンとして用いられました。その言葉はヨハネの第三の手紙13節で用いられており、70人訳聖書で、そして、それはヘブル語の *kanah* を訳して用いられました。それはルール(法規、基準)を意味しています。

神殿の大きさをただ決めるだけの目的に留まらないことがこの測定過程にあるのは実に明らかです。神殿の大きさの決定については全く触れていません。さらに、神殿だけでなく礼拝者たちも測られなくてはなりません。

しかし、どのようにして礼拝者たちを測るのでしょう。明らかにこの種の評価は、肉体的基準より霊的基準に関係しています。神殿と祭壇とその礼拝者たちは創造主の霊的基準に一致して評価されるべきで、ヨハネは彼らを測定(または判断)すべきなのです。

キリストの共同の相続人としては、ヨハネがすべての贖われた人と共にこの裁きの業に参与するので、この責任は明らかです(前章の検討を見よ)。イスラエルはまさにヨハネが再び預言すべき最初の民族であるように、イスラエルは最初に裁かれる民です。「なぜなら、さばきが創造主の家から始まる時が来ているからです」(「イペテロ4章17節」)。

これが常に順序です。創造主はご自身の民を清めるために最初に裁かれ、彼らから汚れを取り除かれます。それから、創造主は罰するためにご自身の敵を裁き、彼らを消し去ります。クリスチャンが、創造主の御国で永遠に奉仕するために清められ整えられるキリストの裁きの座は、白い大なる裁きの座の千年前に起ります。大なる白い裁きの座では、イエス・キリストを信じなかった者は火の池に投げ込まれ、創造主から永遠に分かたれます。

エルサレムに再建された神殿は、イスラエルと創造主を認めない独裁者との間に結ばれた盟約に基づいています。新しい祭壇は、創造主の小羊に対する侮辱です。小羊は罪のための唯一の犠牲を永遠に価値あるものとして捧げていたのです。それで、神殿における礼拝者たちは、創造主をほめたたえたと告白しながらも、キリストを拒否しているのです。それゆえ、創造主の基準で評価される時、すべての人は、その基準に達しえないのです。

その結果、イスラエルは、最大の悩みの時に入ろうとしています。創造主はご自身の民を懲らしめるため邪悪なユダヤ人以外の全世界の国々の重い裁きを用いますが、その過程でご自身の民を清めます。それが「ヤコブの悩みの時」(「エレミヤ記30章7節」で、「国が始まってから、その時に至るまで、かつてなかったほどの悩みの時」(「ダニエル記12章1節」)になり、「世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような、ひどい苦難」(「マタイによる福音書24章21節」)になります。イスラエルに対するこの最後の大きな裁きは黙示録11章13節で始まりませんが、黙示録の残りの大部分は、異邦人に対する創造主の裁きに当てられています。イスラエルの裁きの詳細は、既に預言者「ゼカリヤ書14章1節」と主ご自身「マルコによる福音書13章14、20節」によってあらましが述べられています。

黙示録11章2節 聖所の外の庭は、異邦人に与えられているゆえ、そのままに差し置きなさい。測ってはいけない。彼らは聖なる都を四十二か月の間踏みにする。

伝統的に、異邦人は神殿を取り巻く外庭に入ることは許されていましたが、神殿そのものに入る事は決して許されませんでした。そのためにこの区画は、ヨハネの測量範囲に入れるべきではなかったのです。すなわち、それはイスラエルの裁きで、異邦人の裁きではなかったのです。この点でヨハネはかわるべきでした。エルサレムが最初で、バビロンが後に創造主の怒りを痛切に感知すべきなのです。まず、ご自身の民を清めて、それから、ご自身の敵を処罰します。

さらに、異邦人は、エルサレムを奪い返し、三年半「足もとに踏みにする」のです。その間中、第七のラッパの響きが世界中にこだまの様に鳴り続きます。ユダヤ人は遂に神殿の場所とエルサレムの大部分を所有しますが、異邦人はそれらすべてをもう一度取り戻します。

事実、この神殿は、エルサレムに建てられる第四の神殿で、第一回目はソロモンによって、第二回目はゼルバベルの時代に、第三回目はヘロデによって建てられました。各々の神殿は、侵入してきた異邦人によって順次破壊されました。かつてヨハネ自身が礼拝した第三の神殿は、紀元七〇年テイスト将軍の率いるローマ軍によって破壊されました。その時から、神殿とエルサレムそのものは異邦人の支配下におかれてきました。キリストは「異邦人の時の終わるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされます」(ルカによる福音書21章24節)とユダヤ人の長い追放を予言していました。イスラエルは遂に1948年一つの国としてついに再建され、1967年の六日戦争でエルサレムの市街地の大部分を手に入れました。けれども、神殿の敷地、エルサレ

ムの最も重要な部分は、イスラムの支配下に留まっています。

それから、ついに、西側の王子が、イスラエル政府と、彼らに神殿を建て古代の礼拝を再び制定することを許可する7年の契約をした時、大いなる予言が成就するように思われました。その協定は、黙示録11章の時までに、三年半にわたって運用されており、ユダヤ人は確かに幸福と安全を感じていました。

それにもかかわらず、エルサレムと神殿は、世界の諸国家の支配権をすばやく手に入れた大いなる君主の黙認によってだけ彼らのものだったのです。さらに、彼はユダヤ人に対し、ますます苛立つようになってきました。彼らの創造主に対する礼拝(彼らはまだ創造主をキリストと認めていなかったけれども)は、独裁者が推し進めているヒューマニズム(人間中心主義の)礼拝に有害であり、彼らの血の犠牲は、不愉快なものでした。さらに、これらイスラエルの十四万四千人は実際にキリストを受け入れていて、いたるところで福音を述べ伝えており、世界を悩ましていたあらゆる災害と迫害から保護されているように思われたので

彼らが預言している日々

これはまさに患難期が折り返し点に近い時の状況と思われまます。イスラエル人が自由を享受出来る時は短く、異邦人は間もなく彼らを神殿とエルサレムからもう一度追い出します。異邦人の裁きが来て、異邦人の時が終わる前に、さらに四十二か月にわたって、エルサレムは、異邦人の足元に踏みにじられなくてはなりません。

黙示録11章3節　それから、わたしがわたしのふたりの証人に許すと、彼らは荒布を着て千二百六十日の間預言する。

力ある天使が主題1を変えるために突然現れ、「私の二人の証人」について話します。これら二人の証人が特にキリストの証人であるとの主張は、その天使がキリストであることの更なる証拠です。さらに、彼らの証言は預言のかたちでなされるべきでした。彼らは真の預言者であり、キリストの権威の下、聖なる啓示によって語っており、彼らの預言し証する期間は、一二六〇日で、30日の四十二カ月、すなわち三年半にあたります。

彼らは明らかに裁きの預言者たちです。彼らが衣として羽織っている毛織りの荒布は、長い間の苦しみと悲しみを象徴しています。さらに、彼らの預言は、明らかに世界的規模で、彼らの警告と宣告のメッセージを何処にいる人々も気付いています。彼らはユダヤ人と異邦人の両方に述べ伝えています。事実、この人類の二つの区分を、恐らく二人の証人が示しているのでしょう。それが、なぜ二人の証人なのか、そしてなぜ彼らがこの物語のこの時点で突然紹介されたのかの理由です。ヨハネはユダヤ人と異邦人に関し預言しており、証人たちはユダヤ人と異邦人の両方に預言しています。差し迫った裁きに関する二組の預言は、最初はユダヤ人、最後に異邦人についての裁きです。彼らが預言している間、週一回の説教師ではないことを強調するために、日々に関して裁きの言葉が与えられます。毎日毎日、三年半にわたって、来るべき裁きについての彼らの証言は、反抗的で憤っている世界に伝えられます。

二人の証人が誰かと言うことについては多くの憶測がなされています。多くの人は彼らは律法と預言者を代表していると示唆していますが、話の筋では、彼らは真の人で、預言をし、奇跡を行い、その後死んで、また生き返ることを明らかに示しています。多くの註解者たちは、彼らは将来出て来る二人の大預言者たちで、終わりの時代に創造主が呼び出す人で、彼らの名前は重要ではないので、明らかにされていないと結論しています。これは一つの可能性ですが、キリストが彼らを「私の証人」として特別に認めている点から、そうではないように思われます。あたかも彼らは何らかの理由でキリストに知られていて、ずっと以前にキリストに仕えていたかのようです。オリヴの木と燭台に関するゼカリヤの預言への言及は、同じことを示唆しています〔4節〕。

けれども、彼らが人であり天使でないことは、彼らが死ぬ事実から明らかです。最もありえる結論は、彼らは、昔の時代に忠実な創造主の証人の二人であり、終わりの時代に再び証するために送り返されたということだと思います。

このことはエリヤに関する注目すべき預言で強く裏付けられます。「見よ。わたしは、主の大いなる恐ろしい日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。それは、わたしが来て、のろいでこの地を打ち滅ぼさないうための。」〔マラキ書4章5、6節〕。この預言は、旧約聖書の最後の書の、最後の言葉である点で、なお注目すべきです。

ある人はこの預言はバプテスマのヨハネで成就したとみなしますが、バプテスマのヨハネ自身がそれを否定しています。「また、彼らは聞いた。「では、いったい何ですか。あなたはエリヤですか。」彼は言った。「違います。」〔ヨハネ1章21節〕事実ヨハネは『エリヤの霊と力で』〔ルカによる福音書1章17節〕来ましたが、彼は、エリヤではなかった。そして、ヨハネの到来でマラキの預言は成就しなかった。イエスご自身これを裏付けています。

「エリヤが来て、すべてのことを立て直すのです。」〔マタイによる福音書17章11節〕。

エリヤは死なずして天に引き上げられた〔Ⅱ列王記2章11節〕。創造主はこの様に顕著な行為には理由をお持ちであつたに違いありません。エリヤはエリヤ以前と以後のどの聖徒たちよりも、このような権利を受けるに値していた訳ではなかつたのです。明らかに、創造主はエリヤに彼がなお肉体のまま生き続けることを要する使命があつたのです。それ以降、彼はその状態に留まり、彼は「大いなる恐るべき主の日が来る前」に、イスラエルの人々に対する預言者としての職務を完了するために、地上に帰ってくる時代の終りの時を待っています。

しかし、もしエリヤが証人の一人なら、他の一人は誰でしょうか。註解者の大多数はモーセだと考えています。第一に、そもそもモーセは変貌の山でエリヤと共に現れた〔マタイによる福音書17章3節〕ので、また、モーセとエリヤは創造主の敵に災害のかたちで天からの奇跡を呼び出だし、事実上、律法と預言者たちの代表となり得たからです。

けれども、このような解決には重大な問題があるように思われます。モーセはエリヤのように天に引き上げられないで、死んで葬られた〔申命記34章5、6節〕。山上でのエリヤとモーセが一緒に現れたのは天から実際の肉体が下つて来たのではなく、単なる「幻」でした〔マタイによる福音書17章9節〕。モーセの身体についてミカエルがサタンと論じた〔ユダの手紙9節〕ことに関する奇妙な個所にかかわらず、モーセの「霊」はイエスの十字架以前に死んだばかりのすべての人のように、おそらくイエス・キリストの復活の時まで少なくとも黄泉にあることでしょう。

しかしながら、モーセが証人の一人だと仮定すると最も大きな問題は、モーセは二度死ぬことを意味するのです。それはヘブル人への手紙9章27節の『人間には一度死ぬことが定められている』との言葉に矛盾します。さらに、モーセとエリヤは共にイスラエルに対する預言者でした。ところが、黙示録11章の二人の証人は、ユダヤ人と異邦人すべての世界に対する裁きの預言者です。

これらのことすべてを考慮する時、二人の証人のもう一人は、大洪水前の大族長エノクを明らかに指していると思われまゝ。エノクは、エリヤの他に、死なないで肉体のまま天に直接取り去られた人類の歴史上でただ一人の人でした。「信仰によって、エノクは死を見る事のないように移されました。」〔ヘブル人への手紙11章5節〕。エノクもエリヤも彼らが移された時、死なない身体を与えられたのではなかつた。けれど、キリストがまず彼らの罪のために死に、それから再び生き返ることが必要でした。「すなわち、アダムにあつてすべての人が死んでいるように、キリストによつてすべての人が生かされるからです。しかし各々にその順番があります。まず初穂であるキリスト、次にキリストの再臨のときキリストに属している者です。」〔1コリント人への手紙15章22、23節〕

このようにエノクとエリヤは生まれながらの身体で、彼らが各々天に移されてから現在までの挟まれた時代すべてを通して、天で待っています。それゆえ、私たちの考えが絶対正しいと言えませんが、この二人が、終わりの日、すなわちキリストが地上に再臨される直前に創造主を敬わない世に彼らが預言した証言を成就するために、再び地上に遣わされるイエス・キリストの二人の証人であるという可能性が最も高いのです。

洪水前の人々に与えたエノクの証言は、患難期にある世に対する欠かすことのできないメッセージと言つてよいでしょう。アダムから七代目にあたるエノクも彼らについて預言して言った「見よ。主は千万の聖徒を引き連れて来られる。すべての者に裁きを行ない、不敬虔な者たちの、神（創造主）を恐れずに犯した行

為のいっさいと、また神（創造主）を恐れない罪人どもが主に言い逆らった無礼のいっさいとについて、彼らを罪に定めるためである。」〔ユダの手紙14、15節〕と。

エノクとエリヤは、終わりの日にこの特別な使命に当たるために特に選ばれた人々です。人類歴史最初の大体二千年（アダムからアブラハムまで）にわたって、創造主は人の世を全体として扱っていました。人類歴史の第二部のおおよそ二千年（アブラハムからキリストまで）の間、創造主は主として、選民イスラエルを扱っていました。エノクの預言者としての使命は、最初のグループに対してであり、エノクは伝道し、歴史の流れで異邦人時代の中ごろに天に移されたのは注目に値します。エリヤの使命は、イスラエルに対し、エリヤは伝道しアブラハムからイエスの十字架までの中ごろに天に移されました。

歴史上第三の主なる期間は教会時代です。この時代の継続もおおよそ二千年で、その間キリストの教会に属する人々が、預言として書かれた言葉を通してユダヤ人と異邦人の両方に伝道します。教会の携挙でこの時代は終わります。教会がもはや地上にない患難時代に、創造主は前の二つの時代の最も偉大な二人の預言者をユダヤ人と異邦人に対し、各々の証を完成するために地上に送り返されます。そして、創造主を敬わないすべての世界に対して、創造主の力強い裁きを宣言します。平均三五〇〇年以上天に生まれながらの身体で生き続けた後、彼らは最後の三年半地上で再び伝道し、それから、最後の三日半の間死に付されるのです。

黙示録11章4節 彼らは全地の主の御前にある二本のオリーブの木、また二つの燭台である。

これら二人の証人が、それまで生き続けてきたことを示す興味ある他の証拠があるのです。彼らはゼカリ

ヤの時代にさかのぼって「創造主の前に立っている」とも言われています。

ゼカリヤは一連の驚くべき幻を見ることを許されています。その幻は、明らかに二部から成っていました。第一に神殿の再建に対する現代の計画に対してであり、第二は終わりの時についてです。ゼカリヤの時代（エズラとネヘミヤの時代の間）に、エズラの時代に公認されたとは云っても、神殿の再建の歩はだんだんしばらく来ていたので、ゼカリヤの使命は、為政者ゼルバベルと大祭司ヨシュアにこの仕事をさらに進めるように勇気づける事でした。

これらの幻の一つは、七つのともし火皿が付けられた金でできた燭台の幻でした。そして、ともし火皿には金の管によって油を注ぐ二本のオリーブの木が側面に立っていました。そのオリーブの木について彼は言っています。「これらは、全地の主のそばに立つ、ふたりの油そそがれた者だ。」〔ゼカリヤ書4章14節〕と解説されていたのです。言い回しは明らかに同じです。こういうわけで、二人の証人はヨハネの時代の前に、長い間主の前に、あるいは傍に立っていたのです。

これら二人の偉大な人は、特別に、創造主の御前に常にいるのを習慣としていました。以前、彼らが地上にいた時、エノクについては「創造主と共に歩んだ」〔創世記5章24節〕と言われており、エリヤは最初に「わたしの仕えている、イスラエルの創造主は生きておられる」〔1列王記17章1節〕と自己紹介しています。彼らは、初めから終わりまで生きている長い間、主の間近かに生き続けたのです。彼らは、諸国民と選民に対し、それぞれ創造主の預言者として、特別に油を注がれていて、彼らの使命に対する関心は、地上に在った時も天にある時でも即座に従うこととその熱烈さに変わりなかったのです。

ゼカリヤは幻で、彼らを二本の大きなオリーブの木として見ていました。そして、各々の木は特に強く多

くの実を結ぶ枝を持ち、その枝は金の燭台の先端にある金の鉢に絶え間なく金色の油を注いでいました。その金色の燭台の先端から燭台に在る七つのともし火皿に七つの管を通して油を注ぎます。この全装置は、このように選民イスラエルに対して、またイスラエルを通して来る聖なる光を象徴し、これらすべては創造主の聖霊によって活性化されました。ヨシユア（イエスと同じ名）に対するメッセージは、民族に対する祝福と力は「わたしのしもべ、一つの若枝」〔ゼカリヤ書3章8節〕を通して受け取られなくてはならないということでした。そして、それは順次、究極的に永遠の神殿を建て、その祭司となり王とされる方の名であったのです〔ゼカリヤ記6章12〜13節〕。ゼルバベルに対するメッセージは丁度流れている油で象徴されているように、すべて「権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって」〔ゼカリヤ書4章6節〕来るということでした。枝はキリストで、油は聖霊ですが、両者は二人の油注がれた人によってイスラエルに伝えられました。いわば、このことは主が特に、ゼカリヤの二本のオリーブの木と、黙示録11章のこの二人の証人によって表わされているはずと言われたのです。

けれども、証人たちは、「二つのオリーブの木」だけでなく、「二つの燭台」とも呼ばれています。ゼカリヤ書では、ただ一つの燭台だけでした。その理由は恐らく、一つの燭台は諸民族に対するエノクの証を、もう一つの燭台は、イスラエルに対するエリヤの証を表わしていることでしょう。

主イエス・キリストは彼らを「わたしの二人の証人」と呼びました。そして、このことは、他の証人にはないキリストとの特別な関係を示しています。長い間キリストの近くにいた二人は、キリストを愛した人々に対するキリストの大いなる関心と愛を分け持ち、また、キリストをさげすみ拒否した人々に対するキリストの怒りをも共有していました。

創造主を尊ばない世代の真ん中で、彼らは、この世にいた日々、キリストの近くにいました。彼らが天に移された後、彼らは、何世紀もの間、彼らの兄弟たちと主の近くにおり、ゼカリヤの幻で「これらは、全地の主の傍に立つ、二人の油をそそがれた者だ。」「ゼカリヤ書4章14節」と、私たちのために準備されたことが垣間見られる興味深い閃光です。例え、さし当たった状況は、イスラエルに対する関心だった（こういうわけで、幻にはただ一つの燭台があった）としても、ゼカリヤの聴衆にとって、創造主は全地の主であることを思い起こすことは、なお重要だったことに注目して下さい。

明らかに憶測に過ぎませんが、キリストが地球に來られた時、また、キリストが死んで再び甦られた時、すなわち、週の初めの朝、墓を訪問したそのクライマックスの時、彼らはキリストの傍らに立っていたのか、も知れません。墓が空であった朝、墓の脇に二人の人が立っていたのは注目に値します。「入って見ると、主イエスのからだはなかった。そのため女たちは途方に暮れていると、見よ、まばゆいばかりの衣を着た二人の人が、女たちの近くに來た。」新改訳〔ルカによる福音書24章3〜4節〕。

同じようにキリストが天に歸られる時、二人の人が彼らの傍らに立っていた。「イエスの上って行かれるとき、彼らが天を見つめていると、見よ、白い衣を着た二人の人が、彼らの傍らに立っていて」〔使徒の働き1章10節〕とあります。けれども、キリストの二人の忠実な証人が「彼らの証を終える」〔黙示録11章7節〕ために地球に歸らなければならぬ時が遂にきたのです。彼らはキリストの傍らに立っていたし、いま確かに、キリストは彼らの傍らに立っているのです。

らに害を加えようとする者があれば、必ずこのように殺される。

一四万四千人のイスラエルの証人〔黙示録7章3節、8章4節〕のように、これら二人の証人の長は彼らが証をして
いる三年半の間あらゆる障害から守られます。彼らが地上に呼び寄せる裁きに加えて、罪の宣告と警告に関
する彼らの日々の宣言は、彼らの面前にいるすべての人々を恐れさせ、彼らを憎ませたのです。そして、彼
らの命を取ろうと多くの企てが為されました。しかし、彼らは傷つけられることなく、さらに、ことばを発
するだけで、あたかもなめ尽くす火が彼らの口から飛び出すかのように、敵を殺す力を備えています。そう
でなければ、キリストご自身によって、このような裁きもたらされることはつきり示されています〔Ⅱテ
サロニケ人への手紙2章8節、黙示録2章16節、19章15節〕。さらに、どのような方法であっても彼らを傷つけようとする者は
誰でも、同じ裁きで殺されます。

エリヤは、事実、ずっと以前、口から出ることで天から火を呼び降ろすことが出来た〔Ⅰ列王記18章37～38節、
Ⅱ列王記1章10～12節〕のです。そして、その時、同じように傷を負うことはありませんでした。当時、彼は「イス
ラエルの戦車と騎兵たち」を呼び出すものとして認められていました。

黙示録11章6節 この人たちは、預言をしている期間は雨が降らないように天を閉じる力を持っており、
また、水を血に変え、そのうえ、思うままに、何度でも、あらゆる災害をもって地を打つ力を持っている。

二人の預言者はすべての敵に対し自分自身を防衛するための奇跡的力をもっているだけでなく、地に大災
害を呼び出す力をもっています。まず第一に、彼らは地上で今まで経験したこともない最もひどい干ばつ
を呼び出します。彼らが預言している日々は、千二百六十日で〔3節〕、したがって、その三年半の間、雨が降
らないのです。エリヤが三年半の干ばつをイスラエルの地に呼び求めたように〔ヤコブの手紙5章17節〕、今や彼と
同僚の預言者は、全世界に同じ干ばつを課したのです。

このような干ばつは明らかに全世界に及ぶ飢饉をもたらします。これは明らかに患難期はじめの第三の封
印に書かれている裁きに、対応しているように思われます〔黙示録6章5～6節〕。

この事実は一つのことを指し示していて、二人の証人が預言する三年半は患難期の前半に当たるとい
とです。もっと重要なことは、四十二カ月の間の聖なる都の異邦人による専制政治〔黙示録11章2節〕と獣による
独裁支配〔黙示録13章5節〕は、獣による二人の証人の死刑に〔黙示録11章7節〕よってのみ可能になるとい
うのが明らかです。二人の証人がこのような力を人々と自然界に遂行しているならば、獣が世界支配権を手に入れるこ
とは不可能です。こういうわけで、次のように結論つけることが必要と思われれます。すなわち、ヨハネはここで、
患難期の中ごろの年代にある者の立場から、証人達に関して過去を振り返って、その使命をざっと（一覽して）
見えています。実は、これら挿入的章に付随した歴史の各々〔11、12、13章〕が、患難期中間の折り返し点まで導
てきた背景となる出来事を最初に遡って見ており、ついで、なお将来の出来事の予告を見続けているのです。
干ばつの始まりとほぼ同時に、地上の大気の循環を制止させました〔黙示録7章1節〕。このような気象現象の
組み合わせは、結局ノアの洪水前の大空の上の水を徐々に復興させ、こうして千年期の牧歌風の環境を地球
にもたらすのに役立つのです。

預言者たちの水を血に変える能力は、第一と第二のラツパの裁きに符号すること〔黙示録8章7～9節〕にも注意

して下さい。事実、彼らはまた「地をあらゆる災害で打つ」ことについても責任があったのです。すべての封印の裁きとラツパの裁きは、黙示録 9 章 20 節の纏めの節で『災害』とも呼ばれています。二人の証人は地をあらゆる災害で打つ力を与えられていたので、地上にすむ人々に関する限り、地球が経験しつつある裁きは、証人たちが、災害が地に住む人に降りかかるように祈った禍の祈りによって直接引き起こされたことは明らかです。

このように、色々な災害は、天での動機と地上での原因の両面を持っていたのです。ヨハネは馬人間と天使そして、天から遣わされた裁きの特使を見ました。今や、ヨハネは、彼らもまた二人の証人によって地上に告知されていたことを知ります。これら二人の預言者は、キリストの証人で、天にあるキリストのみことろと完全に調和した状態を地上にもたらしたのです。彼らが地上で求めたことは何事でも天で彼らのために叶えられたのです（マタイによる福音書 18 章 19 節）。

創造主を敬わない地上にいる人々は、非常な激しさでこれらの証人を恐れ憎むようになったのは当然です。そもそも最初から、彼らは、災害は彼らの邪悪さとキリストに反逆し続ける事に対する創造主からの裁きとして下されたと告げられていたのです。

勿論、これらの二人の預言者が三千年と四千年の間それぞれ死なないうで肉体のまま天で、どのようにして生きられたか理解するのは私たちにとって困難です。さらに、実在している時間と空間から成る宇宙に在るすべての物質を支配している標準的な重力でコントロールされている身体で、彼らがどのようにして天に行き天から帰ることが出来たのか。彼らは重力などの自然法則に支配されないのだから、私たちは、恐らく、天使の身体や復活した身体が重力にとらわれず移行出来る事を部分的に（ある程度）理解できます。なぜなら、彼らはこのような力に支配されないからです。しかし、自然界にある物質から成る身体がどのようなにして度良い時に（それがどんな状況にあっても）地球から天に移ることが出来るのでしょうか？ 事実、科学は重力自体をまだ理解できていないのです。

獣の勝利

このような問題に対し、今のところ、私たちに奇跡だという以外に答えはありません。もちろん、自然界には、現代科学でまだとても発見できていないある種の反重力エネルギーがあるのかも知れません（水の上を歩いているペテロのように、また、主によってエチオピアの宦官から取り去られたピリポのように）。明らかに、これがその真相なのかどうか、また、このような出来事が単なる奇跡なのかどうか。これらは当然創造主の能力内のことということは明らかです。すべての自然法則を創始された方は、ご自身の意のままに彼らを用いる事が出来、また修正することが出来るのです。

黙示録 11 章 7 節　そして彼らがあかしを終えると、底知れぬ所から上って来る獣が、彼らと戦って勝ち、彼らを殺す。

彼らの証と彼らが負わせた裁きは、三年半続くと創造主が決めていたのです。その間、特に、諸国の創造主を敬わない軍勢、特に西側諸国の大連合を構築した指揮者によるあらゆる種類の抵抗にも関わらず、彼ら

は不死身であることを証明していました。事実、彼らを捕えるために遣わされたすべての警察や軍隊が自滅したのです。彼らを殺すために送り込まれた暗殺者は、彼らが使おうとした同じ方法で殺されました。彼らは不滅のように思われます。そして、彼らによって始まった恐ろしい災害は何者によっても阻止できず世界中を席卷しました。さらに、大衆は印を押され奇跡的保護を受けた一四万四千人のイスラエル人の証人と共に彼らの証を信じてキリストを受け入れていきました（キリストへと改心していきました）。

しかし、今、黙示録で初めて、私たちは「獣」として知られる驚くべき人物に出会います。彼に関しては多くの情報が与えられています。仮に、彼が底知れぬ所からのぼって来て、サタンに支配されているとしても〔黙示録13章2、18節〕とりわけ、彼は人であって悪霊ではないというのが事実です。

この時点で、あたかもヨハネが既に彼を知っていたかのように、何の説明もなしに、彼は、物語に登場します。事実、これが黙示録で獣について初めて述べられているとしても、ヨハネは預言者ダニエルを通して彼を知っていたのです。ダニエル書七章のダニエルの幻は、野獣によって象徴された四つの大帝國に関するもので、その第四の帝國はこの獣と同じでした。特に、このダニエルの預言した第四の帝國を支配する最後の王は、ヨハネの黙示録のこの個所でヨハネが獣と認めている王です。

さらに、これはダニエルの「来るべき君主」〔ダニエル書9章26節〕と同じです。その君主は、イスラエルと七年の契約を結びイスラエルの神殿再建を許可します。患難期のこの前半を通して、彼は、全世界に及ぶ政治力の強化に関与しました。彼がこのような力を得るのを可能にしているのは、大いなる竜、サタン自身であることもよく判つてきます〔黙示録13章2節〕。けれども、彼は二人の証人と彼らにつき従う人々によって何度も何度も、妨げられ邪魔されてきました。それは彼らが行った罪の宣告による説教と全世界にもたらした壊滅的

災害の両方によつたのです。

遂に、彼は彼らに対し総力戦を仕掛けることを決心します。彼はどんな費用をかけても、そのためにどれほど多くの仲間を失うこともものともしないで、彼らを排除しなければなりません。これは、第六のラツパの災害の時でもあるのです。その時、悪魔的「馬人間」が世界の総人口の三分の一を殺します。全世界の人々は絶望的対策を求めて、望みのほとんどない日々を過ごします。そして、獣は馬人間と、もっと大切なことには、二人の預言者を殺すために大軍隊を派遣します。

そして、遂に、彼は成功します。どうにかして、彼の軍隊は証人たちの周りにあるこれまで克服できなかつた火の壁を首尾よく通過し、彼らを殺します。同時に、悪魔的馬人間の最後のものが滅ぼされ、世界の人々は、突然彼らのすべての苦悩が過ぎ去つたことを実感します。サタンに付く人が創造主に従う人を征服しているし、今や世界の人々は、遂に、突然力を失つたキリストから再び患難が来る恐れもなく、彼らが望むように生きる自由を得たのです。彼らは悔い改めないで〔黙示録9章20節〕、むしろ獣の大勝利を喜んだ。少数の者たちだけが二人の証人が「彼らの証を終えた」だけという事実を理解したのです。一二六〇日が完了しました。そうでなければ獣の軍隊でさえ彼らに触れる事は出来なかつたはずですが。

しかし、この獣とは誰でしょうか。この時点で、ヨハネは、ただ彼は底知れぬ所からのぼって来たと言っています。ダニエル記9章26節で、彼の民は、エルサレムを滅ぼす人々だと述べ、彼の国籍はローマであり、さもなければ少なくとも古代ローマ帝國から出て来た諸民族のひとつから来ると示唆しています。

これらの要因の故、古代、近代の多くの註解者は死から戻ってきた皇帝ネロであろうと示唆しています。近代のある人はこのような生き返りの候補者としてムツソリーニを提案しています。他の人々はニムロデヤ

ユダを示唆しています。けれども、このような示唆のすべては、サタンは創造者ではなく、それゆえ、復活の身体を創造することは出来ないし、さらに、そのからだに過去の偉大な反キリストの霊を戻すことも出来ないという事実を見逃しています。

一方、サタンは、実際の創造には達しないものの、異常な力を持ち、多くの驚くべき方法で自然の過程を操作することが出来るのです。多くの例、たとえば明らかに死んでいて生き返る前のしばしの間、仮死状態に陥っていた神秘主義者に関する東洋やその他の神秘的宗教からの事例が報告されています。UFOに出会ったと証している人々が確信している驚くべき異常な物語のように、異なる例では、死んだ人が仮死状態の間に経験した驚くべき旅について話すために帰ってきています。

獣の場合に、彼をつい最近殺されたが、しばしの合間の後肉体に戻ってきて、大いなる深淵（底知れぬ所）への驚くべき短い旅について語り続けていたことをヨハネが認めていたとしても差し支えありません。そこで彼はサタンから大きな力を受け取っており、諸国民すべてを治める任務も示唆されていたのです。

このような経験は、強い印象を与えるキリストの復活の模造であり、既に彼の政治的手腕に深い感銘を受けていた大衆に働いて彼に従うように納得させるでしょう。彼は偽キリストではなく、反キリストです。彼はキリストの真似をするのではなく、公然とキリストを不敬な言葉で罵り敵対します。そして、彼はサタンから権威を受けていることと、獣と獣の主人は間もなく創造主とキリストを引きずり落とすと自慢します。

関連した聖書（特に黙示録13節1〜6節に注意）の研究によって、彼の疑似復活は患難期の前半の終わり頃に起こるとしても差し支えありません。彼は戻ってきた時サタンと出会ったことを自慢し、二人の証人の生涯を突然終わらせた偉大な力を明らかにします。すると、全世界は驚き、彼の権威に喜んで従います。

黙示録11章8節 彼らの死体は、霊的な理解ではソドムやエジプトと呼ばれる大きな都の大通りにさらされる。彼らの主もその都で十字架につけられたのである。

主イエスは悲しい風刺で、ある時「だが、わたしは、きょうもあすも次の日も進んで行かなければなりません。なぜなら、預言者がエルサレム以外の所で死ぬことはありえないからです。」（ルカによる福音書13章33節）。「ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者。・・・見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。」（マタイによる福音書23章37〜38節）と語りました。

聖なる都、平和の都、創造主の神殿であるエルサレムは、創造主の預言者が死に彼らの主が十字架にかけられた都でもあります。これら二人の最も偉大な預言者も、エルサレムで死ななければなりません。彼らの証は創造主の選民によってさえ拒否されました。そこは獣の軍隊が遂に彼らを捕え殺し、そして彼らの身体を彼らの敵すべてが見るように埋めないうで街路にさらしたままに放置しておきます。

この時のエルサレムの道徳的退廃の証拠はソドムとかエジプトと言う「霊的」名前で示されています。おなじことば（pneumatikos ニューマテコス）は、他の所では唯一ヶ所、コリント人への第一の手紙2章14節で用いられています。そこでは創造主の霊の事は、「霊によって」のみ判断できると言われています。再建された神殿と再開された礼拝をもってしても、聖都エルサレムは、非常に邪悪になっていたので、エルサレムは聖霊と、また精神的にありたい信者たちによってその極めて酷い行為と関連した名「ソドムとかエジプト」の名で呼ばれているのです。ソドムの名そのものは四千年にわたって変態性欲（性的倒錯）者の住処と認め

られています。そして、モーセ以来創造主の民の迫害に関わったエジプトは、ゴグの軍隊からの大救出からほんのわずかな期間にすぎないのに、エルサレムに帯びていた邪悪な性質を皮肉にも示しているのです。

エルサレムはまたおそらくこの時までには国際的センターになっているでしょう。また、様々な種類の営利的山師や政治的いかさま師など、それに伴い殺到する観光客とその観光客をもてなす様々な遊戯の氾濫があり、それに伴う悪業で満ち満ちているでしょう。このすべては、大昔ソドムの日々に口舌を悩ましたように「II ペテロの手紙」2章7〜8節、都にいる宗教的ユダヤ人の魂を悩ませたと書いてもよいかもしれません。しかし、彼らは、結果である繁栄を確かに喜び、それを合理的に取り扱います。創造主の救出と古代の宗教体系の再開に対する彼らの喜びをもつても、彼らはなおキリストに対する彼らの拒否を悔い改めなかった。そして、今や、ずっと昔その道を十字架に向かってキリストが歩かれたその同じ街路に、二人の忠実な証人の身体が死んで横たわっています。

黙示録 11 章 9 節 もろもろの民族、部族、国語、国民に属する人々が、三日半の間、彼らの死体をながめていて、その死体を墓に納めることを許さない。

二人の預言者は、キリストのように、死ぬためにエルサレムに帰ったけれども、彼らの宣教と彼らが呼び出した災害は全地にいるすべての民族に影響を与えました。彼らは、三年半すべての民族の最大の敵と見做され、彼らは、今まで、誰も経験したことがないほどに恐れられ憎まれました。彼らの征服と死刑執行のニュースは、瞬く間に全世界に広がり、衛星放送で家庭や公衆の場にテレビジョンで伝えられました。適当などこ

ろにからだを埋めたいと努めた信者たちは追い払われました。

多くの幸せな傍観者たちの満足げな視線は際限なく続きました。「ついに自由が来た」と彼らは考えたのです。彼らを悩ます者たちから彼らを自由にさせた獣は、すぐに、世界的英雄になりました。彼らは毎日毎日二人の身体を街路に捨て置き、彼らの創造主を誹謗し、彼らの復讐をもともしません。創造主の最も力ある預言者は死に、彼らの災害は終わったのです。

黙示録 11 章 10 節 また地に住む人々は、彼らのことで喜び祝って、互いに贈り物を贈り合う。それは、このふたりの預言者が、地に住む人々を苦しめたからである。

クリスマスが来たようです。世界中でお祭り騒ぎがふさわしく、大祝日の祝いが始まります。再び、大売り出しが人気をっており、贈り物が自由に交換されます。世は歓喜せよ、主は死んだ！ 人々はかつてキリストの誕生をこのように祝った。そして、今や人々はキリストの死に歓喜します。もう彼らは小羊の怒りから逃れるため地下の洞窟に隠れる必要はないのです。天使がこれからまさに襲おうとしている大いなる恐怖を地に住む人々に警告して空を飛び廻ることはないのです。苦痛を与えるサソリイナゴと醜悪な馬の形をとった悪霊は悪い思い出で、それらが再び彼らに苦痛を与えることは決してない、と。

偉大な君主はキリストを打ち破っている。そして誰一人彼と戦える者はもはやいない（黙示録 13 章 4 節）。これからは、彼の力は無敵で、彼は永遠にサタンの名で支配することでしょう。彼は地獄にさえて戻って来ており、死そのものが彼によって克服されている。彼の最も偉大な敵である彼らを苦しめ続ける二人の預言者は、

エルサレムの街路になお横たわっており、世界の人々はすべて、彼の勝利を喜んでいます。彼の勝利は完璧に思われました。

黙示録 11 章 11 節　しかし、三日半の後、神から出たいのちの息が、彼らにはいり、彼らが足で立ち上がったので、それを見ていた人々は非常な恐怖に襲われた。

テレビカメラは、勝利の光景を夜通し放映し続けます。日々のニュースの時間に、世界中に在るすべてのテレビにその光景を映し出します。人々は飲めや歌えの、どんちゃん騒ぎを続けます。彼らの激しい興奮は、エルサレムで死んだ二人の預言者を見る度に増し加わります。

そして、キリストが三日三晩黄泉にくだられたように、預言者たちはエルサレムの街路に三日三晩捨て置かれます。彼らの容赦のない預言の証言が三年半続いたように、彼らのもの言わぬ身体の証言が三日半見られます。

しかし、酔い浮かれ騒いでいた人たちが、恐怖をもって見つめたのは、二人の証人の身体がかすかに動き始めたその時です。ゆっくりと、かの預言者たちは自分の足で立ち上がったので、エルサレムのヤジ馬どもは驚いて尻込みします。彼らの殺気みなぎる顔と四つの刺し貫くような目が、十億ものテレビから人々を睨みつけます。

喜びは瞬く間にぞつとさせられます。聖書はそれを「非常な恐怖」と呼んでいます。そして、それはたぶん「度を越した恐怖」と訳してもよいでしょう。お祭り騒ぎは病的興奮状態になり、もう一度「人々は、その住むすべての所を襲おうとしていることを予想して、恐ろしさのあまり気を失う」〔ルカによる福音書 21 章 26 節〕ことになります。恐らく、多くのものは、心不全と脳出血の発作で死ぬでしょう。そして、その他の多くのものはそれに続いてパニックに、そして確かに群集は恐慌状態に陥ります。

黙示録 11 章 12 節　そのときふたりは、天から大きな声がして、「ここに上れ。」と言つのを聞いた。そこで、彼らは雲に乗って天に上った。彼らの敵はそれを見た。

しかし、それだけではなく、テレビの視聴者は預言者たちの霊が身体に戻るのを見たのです。彼らはまた天から雷のような声が轟くのを聞いた。その声は、立ち上がった聖徒たちに話しかけています。そして、死んでいたキリストの二人の証人は、キリストが甦られたように、今や永遠に生きています。彼らの地上での務めは終わり、今、キリストの御前に戻ることが出来ました。

「ここに上れ」とその声は叫んだのです。これはヨハネ自身が聞いたのと同じメッセージで〔黙示録 4 章 1 節〕それは、子の声聞いて皆が墓から出て来る大いなる招き〔ヨハネ 5 章 28～29 節〕と主が言われた、さらなる証拠も加わります。そして、あのヨハネの経験は、キリストの再臨、教会が携拳され、実際に起こるメッセージそのものでした。ヨハネは奇跡的に、その大いなる日の招来に先立って、同じ経験を通して移されたかのようにした。

今、携拳が、少なくとも二人の証人のために繰り返されたのです。昇天に当たつてのキリストのように〔使徒の働き 1 章 9 節〕、そして、携拳に当たつての信者のように、彼らは空中で彼らの主に会うために雲の中に昇つて行きます〔1 テサロニケ人への手紙 4 章 17 節〕。けれども、この時は、一瞬のうちに〔1 コリント人への手紙 15 章 52 節〕なされた

のではなく、昇って行く彼らの姿をすべての目が見たのです。はじめに彼らは立ち上がり、そして空へと。そして、彼らのことばを拒否し彼らの死を喜んだこれらすべての人、すなわち、彼らのすべての敵、特に、彼らを死に狩り立てた獣は、彼ら（二人の証人）が天高く彼らの主の御許へ昇って行くのを釘付けされたように見つめます。「見た」（ギリシャ語 Theoreo セオレオ）は、強いことばで「凝視」すなわち、突き刺すように目を丸くして見つめることを意味します。その光景は、彼らの敵の最も傲慢で反抗的であった人の心に恐怖の一打を加えるのに十分です。その少し前、このような人々は、キリストは遂に退けられサタンは勝利の座についたとこの上ない自信をもって喜んでいたのでした。しかし、今やキリストが再び勝利を収めました。二人の預言者が天に昇った事は、今までより大きな裁きが天から降ってくるという恐ろしい預言でもありました。三日半のお祭り騒ぎは、それに続く三年半、今までより激しい裁きが迫っていることを物語っているのです。

黙示録11章13節 そのとき、大地震が起こって、都の十分の一が倒れた。この地震のため七千人が死に、生き残った人々は、恐怖に満たされ、天の神をあがめた。

それは、原因と結果に関する問題でないのかも知れません。すなわち、人々が恐れを持って天を見つめている間に、地球は激しく揺れ始めたのです。それはあたかも、キリストの復活で地震が起こった時のようにマタイによる福音書28章2節。わずか前に天からの声を出された方が、地震をも送られたことを疑う者は誰もいなかった。この方こそ、天に居られる創造主で、その方は、過ぎ去った三日間お祭り騒ぎをしてきた彼らを打ちの

めした方ですが、今や、ご自身の力をもう一度明らかに示されたのです。

二人の証人は、「全地の主」の御前に立っていた黙示録11章4節。今や「天の主」は彼らの前に立っていたのです。信じていない大衆は、たとえ彼らが創造主のしもべを死に追いやったとしても、天におられる創造主に栄光を帰さざるをえなかった。不幸にも、彼らの突然の回心は束の間のはずです。間もなく、彼らは、「天の創造主の対してけがしごと」を再び言い始め黙示録16章11節、彼らは、創造主の恐ろしい裁きをもう一度経験しようというかのごとくです。

来るべきことの印に、地震は、エルサレムだけで七千人の死亡者と都の十分の一の倒壊をもたらします。テキストが示すように、もし七千人が男だけだとすると、当時の都には約三十万人くらいの人口があったことを示します。実際に、「倒れる」はしばしば「落下する」と訳すこともできます。そして、それは地面に直接物が突っ込むことを示しています。こうして、地震は都の建物の十分の一を崩壊させたことを暗に示しています。いずれにせよ、残された人々に大きな恐怖を引き起こすのに十分でした。そして、彼らは地上に来るさらに大いなる裁きをまさに見ようとしていることを理解したのです。

黙示録11章14節 第二のわざわいは過ぎ去った。見よ。第三のわざわいがすぐに来る。

この告知は恐らく患難期七年の折り返し点を画するものです。三年半続いた二人の証人の使命黙示録11章3節は今や終わった。そして、獣の完全な支配は終わりの三年半続きます黙示録12章6、14節、13章5節。

この告知がヨハネのためだけになされたとは思われません。おそらく、「地に住む人々」に「三つの苦難」

が来ると、最初に宣言した同じ天使が、天から語ったもので、「中天を飛びながら」大声で呼びかけています〔黙示録 8 章 13 節〕。最初の災害は、悪魔的サソリイナゴによる疫病でした〔黙示録 9 章 12 節〕。第二の災害は、十三カ月以上にわたる、二億もの悪魔のような馬人間のもたらす猛攻撃と、同時に継続している二人の証人の裁きを含みます。そして最後に、エルサレムを倒壊させた大地震です。

そして、今、最後の災難が来ようとしています。それは以前のどの裁きよりさらに悪いのです。なぜなら、それは第七のラツパの裁きと同じだからです。第七のラツパの裁きは「鉢の裁き」〔黙示録 16 章〕の七つすべてを含み、そして、それは患難期の後半全体にわたり、すべての邪悪な人々の撲滅と、地球自体から完全に不純物を取り除き、他を新たにすることで完成、すなわち頂点に達します。

第七のラツパ

黙示録 11 章 15 節 第七の御使いがラツパを吹き鳴らした。すると、天に大きな声々が起こって言った。「この世の国は私たちの主およびそのキリストのものとなった。主は永遠に支配される。」

ここでは、七つのラツパの最後・すなわち第七のラツパの音が遂に鳴り響いています。最初の六つのラツパは患難期の最初の半分を通して、地上に起こる様々な出来事を導いてきました〔黙示録 8 章 9 章〕。最後のラツパの音は大患難期の後半全体を通して鳴り響きます。

コリント第一の手紙 15 章 52 節に「終わりのラツパ」に対する重要な言及があります。そこには、この終わりのラツパが鳴り響いている時に、死人の甦りと生きている聖徒たちが死なない身体に変えられると述べられています。黙示録 11 章 15 節とその後の文章に、甦りについての特別な言及はありません。一方、18 節には死者の裁きとキリストのしもべに対し報酬を与える事についての言及があり、その両方とも復活を前提としています。

けれども、コリント第一の手紙のこの節の「終わりのラツパ」は、明らかに、テサロニケ第一の手紙 4 章 16 〔17 節の「神（創造主）のラツパ」と同じです。ところが、黙示録の七つのラツパは「天使のラツパ」で、これらは明らかに二つの異なるラツパです。さらに、当然の成り行きとして、コリント第一の手紙 15 章とテサロニケ第一の手紙 4 章に書かれているように、キリストにある者たちの甦りと携挙は、患難期の前に起こらなければならぬことは明らかです。それなのに、第七の天使は、患難期の途中でラツパを響かせます。

しかし、もしその通りなら、なぜコリント第一の手紙 15 章 52 節のラツパが「終わりのラツパ」と言われているのでしょうか。少なくとも、黙示録の第七のラツパすべてが後で鳴り響くのに？ さらに、創造主ご自身が患難期の終わり近くで吹き鳴らすはずのラツパさえあるのです。「その時、主は彼らの上に現れて、その矢を稲妻のように射られる。主・創造主はラツパを吹きならし、南のつむじ風に乗って出てこられる。」口語訳〔モカリヤ書 9 章 14 節〕。前後関係から、これは患難期の終わりに当たったのまさに創造主の超自然的イスラエル救出に関する言及です。この出来事は、おそらく、イエス・キリストがマタイの福音書 24 章 29 〔31 節で述べられた出来事と同じです。「これらの日の苦難に続いてすぐに、・・・人の子は大きなラツパの響きとともに、御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで、四方からその選びの民を集めます。」

このように、いくつかのラツパは、コリント第一の手紙 15 章 52 節の「終わりのラツパ」である「創造主のラツ

「パ」の後に天使と創造主ご自身によつて吹かれます。この節にある用語は、明らかに幾つかのラッパの確固たる年代の前後関係を意味するのではなく、その配列は相対的なものです。同様に、ヨハネによる福音書6章40節（「私はその人たちを終わりの日によりみがえらせます」）、ヨハネの福音書11章24節（「終わりの日の甦りの時に・・・」）のような節の「終わりの日」とその他のいくつかの所での日は、宇宙の最後の日ではありません。なぜなら時間は決して終わることはないのですから。

甦りが起こる「終わりの日」は、教会時代の終わりの日です。そして、復活の印である終わりのラッパは、教会時代の終わりに創造主によつて吹かれる最後のラッパですが、これは患難期を終わらせる他の最後のラッパを、または、祉福千年期の終わりに救われなかったすべての者を創造主の裁きの御座に集めるためのもう一つの最後のラッパを締め出すものではありません。また、ある人は、「終わりの日」は千年以上にまたがると推論します（「エペテロの手紙3章8節」。終わりの日は、患難期前、患難期中、患難期後、と千年期（黙示録20章4～5節）にまたがるすべての甦りを含むと結論します。その証拠には、最後のラッパの音は短いただ一回きりの響きではなくて、シナイ山で創造主の角笛が鳴り響いたように（出エジプト記19章19節）、ラッパの音は、千年も続く長い「終わりの日」の全期間を通して長く鳴り続けると仮定されます。

ともかく、この節は、コリント第一の手紙の「最後のラッパ」は黙示録の七つのラッパと同じだと主張しているいわゆる「患難期後携拳論者」やその他の人々の主張を正当化するものではありません。後者は大いなる裁きを解き放つ天使が吹くラッパですが、前者は、死人を甦らせる創造主の力強いラッパの音です。

第七のラッパの響きには、天の御座での大合唱が伴っていて、小羊の大いなる回復の御業が完成（クライマックス）に近づきつつあるのを喜んでいきます。主が創造された地球、そして、ご自身の血で贖われた地球は間

もなくもう一度ご自身のものとなり、決して再び失われることはないのです。

天のその声々による証言は、七つのラッパによつて動き始める出来事の結果を予測し、まとめています。もはや時が延ばされる事はない（黙示録10章6節）ことを保証するかのよう。この節での永遠の主権についてのことは、究極的な成就を期待しています。その成就是確かで、それが保証している出来事は、いまや動かしえない状態で進展し始めています。

「地の王たちは立ち上がり、指導者たちは、主とキリストに反抗して、一つに組んだ。」（使徒の働き4章26節）。この使徒の働き4章26節に引用されたように、詩篇2篇の言外の意味に注意して下さい。

主であり彼の救いに対するこの世の国々の長年にわたる創造主とキリストに対する反逆は、創造主が長い間の忍耐の故に赦されました。そして、裁きよりむしろ悔い改めに至ることを願ったのです。しかし、主はいつまでもただ忍耐されるものではありません。これらすべての王国がキリストの王国となる時はまもなく来ます。そして、キリストは永遠に支配されるのです。

黙示録11章16節 それから、神（創造主）の御前で自分たちの座に着いている二十四人の長老たちも、地にひれ伏し、神（創造主）を礼拝して

二十四人の長老たちは、前回、患難期の初めに（黙示録5章14節）記されてきました。そして、今再び患難期の真ん中に記されています（黙示録7章11節にある長老に対する言及は、天に集められた患難期の聖徒たちすべてと共に、患難期の終わりを楽しんで待つていることを示しています）。

すでに検討したように、これら長老たちは、キリストの再臨前の信者で、贖われ携挙された人々を表わしています。最初の三年半のすべての裁きの間、長老たちは御座の周りに座り、一心に、地上での出来事を見ています。素晴らしい巻き物にある第一の封印をひも解く直前、彼らは創造主を拜むために御前にひれ伏しました〔黙示録5章14節〕。今もう一度、彼らは御座から降り、主を賛美するために平伏します。このことは患難期の終わりにもう一度起こります〔黙示録19章4節〕。

黙示録11章17節 言った。「万物の支配者、常にいまし、昔います神（創造主）である主。あなたが、その偉大な力を働かせて、王となられたことを感謝します。」〔新改訳〕

「今いまし、昔いませる、全能者にして主なる神よ。大いなる御力をふるって支配なさったことを、感謝します。」〔口語訳〕

たとえ主はまだ文字通りに支配をしていないとしても、二人の証人の廻りは、天にいるこれらの人々に対して、少なくとも主が統治する力を持つておられることを疑問の余地なく証明していたのです。第七のラッパの音によって始まる変更できない最後の大きな裁きが、創造主の目的を確かに成就します。天にいる長老たちとすべての聖徒たちは、またもや全能の方・唯一の独立自存の創造主・世の始まる前、永遠の昔から創造主であられた唯一の方としてキリストを認めます。

勿論、この創造主は、主イエス・キリストご自身以外のどのような方でもありません。ヨハネがキリストに偶然出会った最初の時と同じ言い回しで、栄化されたキリストであることを主張していました〔黙示録1章4、8節〕。天の御座にいます唯一の方を、四つのケルビムも同じ言い回しで説明していました〔黙示録4章8節〕。「支配なさった」ではなく、「王としてご自身を示された」の方が良いのです。この時点で、キリストはまだ実際には地上の王国を得ておられませんし、キリストの千年王国での支配も始まっていません。しかし、キリストご自身は永遠で全能の創造主であることを明らかに示され、それゆえすべての上に立つ完全な支配者なのです。

黙示録11章18節 諸国の民は怒りました。しかし、あなたの御怒りの日が来ました。死者のさばかれる時、あなたのしもべである預言者たち、聖徒たち、また小さい者も大きい者もすべてあなたの御名を恐れかしこむ者たちに報いの与えられる時、地を滅ぼす者どもの滅ぼされる時です。

長老たちがキリスト・全能の主の前にひれ伏し礼拝した時、彼らは七つの大いなる出来事をこのように予想しています。

1. キリストはご自身の力をすべての被造物にはつきり見せている。
2. キリストはご自身をすべての王たちの王であることを明らかにしておられる。
3. キリストはご自身に逆らうすべての国々に容赦のない怒りを現わされる
4. キリストは、反逆し生きているすべてのものに正しい（当然の）怒りを現わしておられる。
5. キリストは救われないで死んだすべての者に最後の裁きを準備しておられる。
6. キリストはキリストを信じ従ったすべての者に恵み深い報酬を準備しておられる。

7. キリストは地を悪化させたすべての者に永遠の破滅を定めておられる。

これが、心優しくへりくだっておられ「マタイによる福音書11章29節」、その口からは恵みのことばが発せられた「ルカによる福音書4章22節」同じ主イエス・キリストです。しかし、彼はすべての裁きを行われる方でもあり「ヨハネによる福音書5章22節」、創造主の怒りの大いなる酒ぶねを踏まれる方です【黙示録14章19～20節、19章15節】。

世界の諸民族は、キリストの二人の証人を死刑に処し【黙示録13章7節、17章13節】、キリストの最大の敵・獣に悪いと知りながら彼ら自身の統治権を進んで与えることで、皆、キリストを拒否することを決定したのです。辛うじて個人を火の中から救い出すいくらかの望みはあったにしても、ほとんどの諸国民は皆引き返し得ない点を通り過ぎており、今はただ「裁きと、逆らう人たちを焼き尽くす激しい火とを恐れながら待つよりほかはない」【ヘブル人への手紙12章27節】事実を経験するのです。

死んだ者が裁きのために甦るまで千年の間待たなくてはなりません【黙示録20章11～15節】、しかし、裁きの時は定まっております、裁きは確かに来ます。キリストに信頼している預言者たち、聖徒たち、キリストの名を恐れるすべての者への報酬は、キリストの裁きの座で与えられます【ローマ人への手紙14章10・12節、1コリント人への手紙3章11～15節、2コリント人への手紙5章10節】。それは携挙に続いて起こりますが、なお報酬を与えなくてはならない患難期の聖徒たちと千年期の聖徒たちがいて、彼らへの報酬はそれぞれ患難期の終わりころ、と千年期の終わりになるでしょう。

「地を滅ぼす」者どもの裁きについて、特別な注意が布告されているのは重要です。創造主の人類への最初の素晴らしい戒めは、「地を従わせよ」【創世記1章28節】という命令を含んでいたのです。人は地球全体に支配権を行使するはずでしたが、人類は管理と奉仕に関する主権者となるべきであって、独裁と搾取の支配権ではなかったのです。アダムとその子孫は人の利益と創造主の栄光のために、被造物を調達し利用するべきでした。さらに、この大いなる委任は、大洪水後ノアに対し更新され、それ以降、決して撤回されることはないのです。人類は、今なお創造主の下にあって、地球と創造されたすべての被造物を適切に管理するようにとこの最初の委任に対して責任があります。

しかし、その代わりに、人はすべてを管理したが、地を滅ぼしたのです。人が管理するように命じられた動植物を世話する代わりに、人は彼らの敵になり、多くの動植物の種類が絶滅させられてしまいました。戦争は森林を荒廃させ、土地を焦土と化したのです。人のむさぼりは、汚染された水と有害な大気を生み出した。栄養物は土壌から取り去られ、土地は過剰に開墾され、過剰に家畜を放牧した。風景は開発された鉱山や都会にある貧民窟でだめになっています。

これらすべてが悪化する過程は、人の罪の結果、創造主の裁きが速められさえします。たとえば、大洪水は、創造主が、人が用いるために創造された理想的な洪水前の環境を破壊したただけではなく、洪水で堆積した厚い堆積物の中におびただしい数の死んだ動植物を置き去りにしたのです。これらの多くは、強烈な熱と圧力の結果、色々な物理化学的過程を通して、人が地球を占有しているその後の世紀に燃料として燃やされた資源に変えられました。そしてこれら資源、いわゆる「化石燃料」は、無駄が多く、汚染を生み出すことで悪名が高いのです。その訳は創造主は少なくとも動物たちをこのような目的のためにお造りになったのではないことは確かです。

すべての中で一番悪いことは、人の邪悪さでした。人間同士に対し、また創造主に敵対するという面で、

人に見られる邪悪さです。「滅ぼす」という言葉は、実際には、「不正」と同じです。人は地球に対する不正行為によって地球を滅ぼしたのです。地球を創造主の栄光のために用いないで、その代わりに、自分の貪欲と肉欲を満足させる為に用いたのです。それゆえ、創造主は最終的に破壊者を破壊し、不正な者を不正なまま滅ぼすことにしました。「不正を行なう者はますます不正を行ない、汚れた者はますます汚れを行ない、正しい者はいよいよ正しいことを行ない、聖なる者はさらに聖なることを行なうまにさせよ。」【黙示録22章11節】それができるのは創造主であるキリストだけです。彼は「たましいもからだも、ともにゲヘナで滅ぼすことのできる方」だからです【マタイによる福音書10章28節】。

黙示録11章19節 それから、天にある、神の神殿が開かれた。神殿の中に、契約の箱が見えた。また、稲妻、声、雷鳴、地震が起こり、大きな雹が降った。

ヨハネの注意はなお天に向けられています。そこは御座の前にいた二十四人の長老たちが腰をかかめて賛美しているのをヨハネが聞いたところです。けれども、ほんの少し前、主は彼ヨハネの注意をエルサレムにある地上の神殿に引きつけていました【黙示録11章1、2節】。その神殿は今や獣が自分の為に用いるために獣に完全に乗っ取られていたのです。

ヨハネが初めて天で神殿を見、それを書いたのはこの文脈です。ヨハネは御座とガラスの海【黙示録4章5節】と同時に祭壇【黙示録6章9節、8章3〜5節】を書き留めました。ヨハネはまた患難期の聖徒たちが天にある神殿で行う将来の奉仕に言及していました【黙示録7章15節】。けれども、ここでヨハネは、最初に、神殿そのものこそ

の主要部分・聖所に注意を促しています。

実際に天に神殿があることは旧訳聖書と新約聖書の両方で確認しています。預言者イザヤは幻で天の神殿を見【イザヤ書6章1節】、ヘブル人への手紙の著者は、地上の幕屋（そして、後ではソロモンの神殿）が、「人間によらず主によって設けられた真の幕屋なる聖所」【ヘブル人への手紙8章2節】に倣って造られていたことを明らかにしています。地上の神殿での祭司の仕事は、「天にある聖所のひな型と影」【ヘブル人への手紙8章5節】とに仕えることでした。地上の祭壇での犠牲は、天の祭壇で人の罪のために1つのいけにえが永遠に捧げられた型に過ぎなかつたのです。なぜなら、それは「天にある物のひな型は、これらのものできよめられる必要があるが、天にあるものは、これらよりさらに優れたいけにえで、きよめられねばならない。ところが、キリストは、ほんとうのものの模型にすぎない、手で造った聖所にはいらぬで、上なる天にはいり、今や私たちのために神（創造主）の御前に出て下さったのである。」【ヘブル人への手紙9章23、24節】。

これが、本当の天にある都にある真の神殿です。そこに今キリストはご自身の真の身体、栄化された復活の身体でおられます。キリストが彼の面前に聖徒たちを復活させ、携挙させるために天から下られる時に「Iテサロニケ人への手紙4章16節」、神殿を伴った都をキリストはご自身と一緒に持ってきたのです。

罪の代価が最終的に支払われた時【マタイによる福音書27章51節、ヘブル人への手紙10章19〜20節】の地上の神殿のように、神殿の内部の最も聖なる場所が天の神殿と共に、今や開かれます。

創造主ご自身が住まわれる聖にして聖なる所（そして、キリストが地上の幕屋で大祭司と会われる）聖なるところに、ヨハネは驚くべき物を見たのです。そこに契約の箱（アーク）があつたのです！アークは神殿の最も聖なる特別な部分でした。なぜなら、創造主が御自分の民と親しく交わるのが、アークを覆っている

る恵みの座の上で、それを覆っているケルビムの間のその所からだからです。アークの中にはマナの入った壺とアロンの杖と最も大切な創造主の律法を記した二枚の石の板がありました〔ヘブル人への手紙9章3〜5節〕。

契約の箱が消失したのは、ネブカデネザルが紀元前六百年に神殿を破壊し、ユダヤ人の捕虜をバビロンに連れ去った時でした。あの時、「創造主の宮のすべての大小の器具、主の宮の財宝・・・すべて」は〔二歴代誌36章18節〕。主の宮を飾っていた青銅と他の金属と共に〔一列王記25章13〜20節〕バビロンへ持ち去られました。しかし、宮にある最も大切で恐らく最も高価な（アークは純金で上張りされており、恵みの座とケルビムは純粋の金であった。）品目である契約の箱に関しては一言も述べられていません。同時に、第二歴代誌、第二列王記の記録の著者とエレミヤ（52章、同時にエレミヤ哀歌）にとつて、確かに最も意義深い品目です。しかし、クロスが宮を再建するように命じ、同時にすべての器を送り返した時、契約の箱（アーク）については何も語られていませんでした〔エズラ記1章1〜11節〕。

創造主は契約の箱が破壊されるのをそのまま放置する筈はないと思われます。サムエル、サウロ、ダヴィデの時代、ペリシテ人によつて以前契約の箱（アーク）が奪われた時、創造主はダヴィデが最後のエルサレムにある幕屋に契約の箱を最後に持ち還るまでほぼ百年の間、それが摂理の内に護られるのを見届けられました〔一サムエル記4章4、11、22節。一列王記15章28節、16章1節〕。

何世紀もの間、人々は、ノアの箱舟を探し求めたように契約の箱を探すのに好奇心をそざられてきました。アークは修復された神殿になく、ヘロデの神殿にもなく、患難期の神殿にもありませんでした。エゼキエル40〜48章に記されている千年期の神殿にさえアークについてはなにも述べられていません。人々は、アークはエチオピアのほら穴に、アラビアの砂漠に、またはどこかに保管されていると噂しています。

しかし、どこにあるかに関して秘密にされているわけではありません。創造主がヨハネに黙示録を啓示された時、創造主はヨハネに示されました。アークは天にある神殿に安全に保管されていました。確かにモーセの十戒の二枚の板もそこにありました。もし創造主がエノクとエリヤを天に移されたなら、そして、もし甦ったキリストが天に昇ることが出来たなら、創造主はネブカデネザルの軍隊が神殿を略奪する前に天使たちを用いてエルサレムから契約の箱・アークを持ち去り、天に建設中の新しいエルサレムの真の幕屋へとそれを完全に運ばせることは安易に出来たはずです。

アークは千年期の後まで天に留まります。その時、新しいエルサレム（それ自体が真の幕屋です——黙示録21章3節）が創造主の御許・天から地上に下つて来ます。都自体が幕屋であり、特に「創造主であられる主と、小羊とが都の神殿だからである」〔黙示録21章22節〕とあるとおり、都の中には神殿はありません。しかし、創造主の契約の箱は恵みの御座と共にそこにあり、創造主の御座そのものを。または、少なくとも、永遠にご自身と会われる御座を現わしています。

この荘厳な啓示に伴つて、もう一度天で稲光と声と雷鳴が発せられます。それに、大地震と雹を伴う嵐が地上に来ます。これら天の現象は、患難期の初め〔黙示録4章5節〕ここ患難期の中間に、そして患難期の終りに起こります。

その時起こった大嵐や地震は恐らく全地球を巻き込みます。エルサレムの地震に加えて、地上に三年半の干ばつを宣告した二人の証人の甦りがあります。その間、地に住む人々は雨を求めて叫びました。さて、干ばつは突然止み、それに代わってひどい雨あらがやってきたのです。証人たちが天に帰るや否や、突然、風と雨を差し止めていた天使たちは、干ばつを止めました。その結果、地上に凄まじい嵐が来しました。それ

はことに創造主の力と創造主を敬わないすべての人に対する怒りを証明しているのです。